

日本学術会議第二部拡大役員会（第25期・第2回）

1. 日 時 令和3年7月2日（金） 10:00～11:55

2. 形 式 ビデオ会議

3. 出席者 第二部役員 部長 武田 洋幸、副部長 丹下 健
幹事 尾崎 紀夫、幹事 神田 玲子
基礎生物学委員会 委員長 小林 武彦
統合生物学委員会 委員 池邊 このみ
農学委員会 委員長 仁科 弘重
食料科学委員会 委員長 古谷 研、
基礎医学委員会 委員長 松田 道行
臨床医学委員会 委員長 名越 澄子
健康・生活科学委員会 委員長 小松 浩子
歯学委員会 委員長 市川 哲雄
薬学委員会 副委員長 遠藤 玉夫
生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会
委員長 熊谷 日登美
大規模感染症予防・制圧体制検討分科会
委員長 秋葉 澄伯
(オブザーバー) 副会長 望月 眞弓

4. 資 料

- 1) アンケート_統合版_新型コロナウイルス感染症に関する第二部を中心とした提言について
- 2) 科学的助言機能・「提言」等のあり方の見直しについて

5. 議 題

冒頭、望月副会長から最近の日本学術会議の動向について報告がなされ、新型コロナウイルス感染症関連の会長談話やイベント開催が紹介された。また科学的助言の在り方や部横断の連絡会議の設置に向けた日本学術会議内部での議論や、CSTIでの日本学術会議に関する議論があることや、経費状況や予算の課題、次年度に向けた取り組みが行われていることが説明された。

続いて、武田部長から本会合の議事の流れが説明されたのち、議題2、1、3、4の順で審議が行われた。

議題1) 第二部主導のコロナ禍関連の提言審議の進め方について

武田部長より「新型コロナウイルス感染症に関する第二部を中心とした提言に関するアンケート」への協力に対して謝辞が述べられた。続いて、丹下副部長が学術フォーラム「コロナ禍を共に生きる」（4回シリーズ）の準備状況を説明し、第3回、第4回での講演を企画するにあたり、一般の方に情報発信したい具体的なテーマの提案や講師の推薦をしてほしいと述べた。主な提案は以下の通り。

- ・次のパンデミックに備えるための臨床研究の促進や国民からの理解醸成
- ・アディクションや免疫学の視点からの啓発
- ・高齢者のフレイル、子どもの心身の発達など社会的弱者への影響
- ・パンデミックに対応する人材の育成
- ・科学に基づいた政策決定の在り方／危機対応政策決定への科学者の関与
- ・しゃべる、食べるといった感染ルートに関係した生活習慣等
- ・感染が都市部に集中したことの反省から、密にならない社会作り

武田部長は、丹下副部長と神田幹事に対し、上記の意見を参考にして、第3回、第4回での講演の企画を進めるよう、指示をした。また学術フォーラムは日本学術会議主催、公開シンポジウムは分科会と学会の共同主催といった違いはあるが、既に公開シンポジウムで取り上げたテーマから重要なものを選んで学術フォーラムとして開催することも可能である旨、補足説明した。

次いで武田部長が、新型コロナウイルスに関する連絡会議の設置を提案した。その経緯として、これまでコロナ対応WGを中心に、アンケート調査やHPからの情報発信や学術フォーラムの開催、学術の動向への特集掲載を実施し、今後、分科会の審議連携が必要と考えていたところ、6月の幹事会で新たに連絡会議制度ができたため、と説明した。連絡会議に関する主な質疑は以下の通り。

- ・連絡会議が提言をまとめるのか
 - （武田部長）連絡会議は関連する提言を議論している分科会の合同審議を促すなどの調整役であり、提言をまとめるわけではない。
- ・連絡会議を介して、他部からも2部の分科会に参加してもらえる人材が見つかり、有用
- ・連絡会議の中に、臨床研究関連、個人情報関連、ワクチン開発関連、健康や生活関連、政策関連、レジリエンス関連といった課題別のサブグループを作ってはどうか
- ・連絡会議が機能することで分科会の在り方も変わる
- ・今後のパンデミックに備えるための審議を促進するような名称にしてはどうか
- ・今後のパンデミックに備えるための提言であれば、政府も関心があるはず。
- ・議論の途中経過を記録や報告などを公表したり、ステークホルダーとコミュニケーションをするプロセスを加えることで、アピール性の高い提言にまとめることができる。
- ・研究者と国民の間の溝を埋めるには好機。社会を動かす戦略を考える会議体があってもいい。
 - （望月副会長）学術会議全体に関しては広報委員会が検討している。また社会と科学委員会でもステークホルダーとの定期的連携をする仕組みづくりを検討している。両委員会の検討状況にもよるが、個別のテーマであれば、連絡会議の方が機動的な対応が可能かもしれない。

上記のように、連絡会議の設置に賛同を得られたため、8月以降の幹事会にて2部より設置提案を行うことになった。

議題2) 提言発出のプロセスについて

武田部長が資料「科学的助言機能・「提言」等のあり方の見直しについて」に基づき、幹事会の問題意識や検討状況、今後の学術会議全体での議論と決定までのプロセスを説明した。

続いて分科会からのボトムアップ型（専門的で分野連携的なもの）の「意思の表出」のあり方について以下の意見交換を行った。

- ・提言にするかどうかの確認作業はどこで行うのか
 - （武田部長）具体的にはこれから決めるが、全てを役員で行うことは難しいので、拡大役員会の協力も必要と考えている
- ・分科会からの発出は報告や記録、提言はトップダウンという区分か
 - （武田部長）ボトムアップ型の提言発出もありうる
- ・具体的には、どのように他部の委員会の意見を聞くのか
 - （武田部長）幹事会で調整することになるが、事前に話がついていてもよい。重要なテーマの場合は連絡会議を作るのも選択肢の一つ。早く結論を出したい場合は、課題別委員会に持ち込んで部を跨いだ議論ができる
- ・本格的に提言をまとめる前に、意見や助言を受けるプロセスには賛成
- ・そうはいつでも、ある程度まとまった段階でないと審査できないのではないか
- ・学術会議会員全員で、提言を承認する仕組みがあってもいい
- ・25期では分科会レベルで提言をまとめるのは現時点で荷が重いと、自制している面もある。
- （望月副会長）分科会の役目は提言を作ることと考えている人も多いがそれだけでなく、イベントを開催して社会に情報発信することでも良いと思う。
- ・分科会の設置も今後議論になる。最初から部をまたいだ分科会を作るという方向性もあり、提言と分科会の議論はリンクしている

さらに分野別委員会の役割についても議論された。主な意見は以下の通り。

- ・日本の将来ビジョンを検討するために分野別委員会の役割を重くするべき
 - （武田部長）賛成。これまで、学術会議の活動は分科会の議論をベースにしてきたが、重要なテーマに関しては分野別委員会が主となるのがよい
- ・分野別委員会には分科会の委員長が全て参加しているのか
 - 参加していない委員会もあるが、すでに分野別委員会に分科会からの情報の吸い上げをお願いしている。今ではWeb会議も定着し、委員を増やすことも可能
- ・分野別委員会で提言をまとめることになれば提言の数が絞られ、提言を取りまとめている段階で省庁からの意見を求めるなどの対応が可能になる

上記の議論の結果、分野別委員会には全分科会の委員長に参加いただくことを本会議にて決議し、7月以降の幹事会で委員追加の申請を行うこととした。引き続き、夏季部会において、分野別委員会の役割の明確化や分科会間のネットワーク形成を進めるための議論を行う。

3) 夏季部会について

武田部長が、今年度の夏季部会はWeb形式で行い、役員会が担当すると述べた。主な

議題は、提言作成のプロセスや連絡会議の設置の審議と分野別委員会からの報告とし、講演2題も企画すると述べた。今後には日程調整を行う。

出席者から事務局に対し、新たな会議体ができることから組織の役割を理解しやすくするため、組織の相関図を作ってほしいとの要望が述べられた。

4) その他

参加者から、事務局に対して、正式な会合開催の手続きについて質問があった。事務局からの主な説明は以下の通り。

- ・会合の1か月前、おそくとも3週間前に、議題と開催日時を事務局に連絡する
- ・予算がない場合、謝金辞退の申し出があれば、会合の開催は可能。
- ・各委員から辞退を連絡する必要はなく、委員長が一括辞退を連絡するのでもよい。

武田部長から、7月17日に開催する新型コロナウイルス関連のイベントについて案内された。

以上